



# とらいあんどぐる



2015 年 4 月

一音会ミュージックスクール発行

## 「とらいあんどぐる」

「とらいあんどぐる」は、この号で、300号になります。

「とらいあんどぐる」は、毎月発行していますが、厳密にいうと、年に3回、合併号を出しているのです、1年に9回、発行していることとなります。

300号は、33年以上に相当します。

書き手が死ぬという最大の危機の時にも、発行を止めませんでした。33年超の間、1号も休むことなく、発行してきました。

もはや執念と呼んで良いかもしれません。

もちろん、私の母の執念です。

私が母のあとを継いで、「とらいあんどぐる」を書くようになったのは、272号からですから、「なんと浅い歴史か!」と思います。

しかし、私が「とらいあんどぐる」にかかわるようになったのは、2005年からでした。私の中では昨日のことのように、もう10年も前のこととなります。

それ以前にも、私は「とらいあんどぐる」にかぎらず、母の原稿全般につい

て、校正をずっと担当してきました。

しかし「とらいあんぐる」に関しては、母は1文字、1句読点にいたるまで、強いこだわりがあり、原稿を作成するのは、もっぱら母一人、私が入り込む余地はありませんでした。

私はレイアウトを整えたり、誤字脱字をチェックしたりするくらいでした。

しかし、2005年になって、母が突然、「アヤコも『とらいあんぐる』を書きなさい」と、強くいうようになりました。

私はもちろん、ことわりました。

「書けるわけない！」

何度も、何度も、ことわりました。

「3号に1号で良いから、、、いや半年に1度で良いから、書きなさい」とも、いいました。

おそろしいことをいう人だと思いました。

母は、毎号、渾身の力でエッセイを書いていた。

母は作家ではありません。ただの素人です。

しかし、上手な文章でなくとも、本気の文章は、うったえるものがあると、身内びいきではありますが、思っていました。

母のエッセイが続く中、突然、私などが書いたものが、入れるわけがありません。

見劣りするに決まっています。

「むーりー！」

ことわる私に、母は何度も説得、いえ、命令します。

私は思いました。

母は疲れてしまったのだろうか……。

そこで、お人よしの私は、ついこういってしまいます。

「お母さんのかわりに、『とらいあんぐる』を書くななんて無理。『とらいあんぐる』は、すべての生徒さんが読む、大切な新聞だもの。とてもじゃないけど、私には荷が重すぎる。でも、お母さんが原稿を書く助けになることだったら、何でもするよ」

それをきいた母が、「しめた！」という顔をします。

その顔を見て、私は「しまった！」  
と思います。

また、やられました。いつも私は、  
はめられてばかりです。

母は、疲れてなんかいませんでした。  
それは、しばらくして分かるのです。  
その頃、私の息子が幼稚園に入り、  
私に少し自由な時間ができたという、  
単にそういうタイミングだったのだろ  
うと、後から思います。

母は、「じゃあ、手伝ってね！」と、  
高らかに宣言します。

ここから、私は正式に「とらいあん  
ぐる」のアシスタントになります。

最初は、口述入力でした。当時、母  
の指の状態は非常に悪く、パソコンの  
キーを打つことが、母の指に大きな負  
担になっていたことは確かでした。

母がしゃべり、私がそのまま、キー  
を打ちます。

「これなら簡単だ！」と、私はほっ  
としました。同時に母の指の負担をな  
くせたことを喜びました。

ところが、翌月にはもう、様子が違

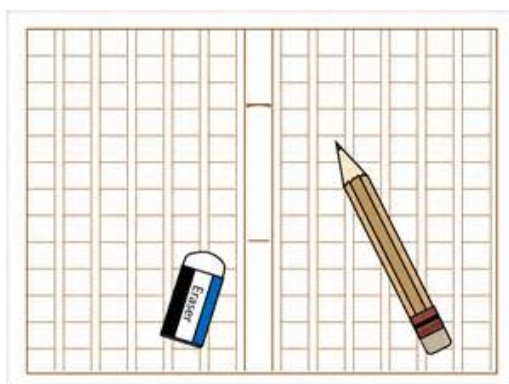
ってきます。

母が、たびたび「次はどう続けたら  
良いと思う？」という問いを投げかけ  
てくるのです。

「お母さんは、〜〜〜という結論  
に導くつもりなの。だとすると、どう  
いうふうに文章を続けたら良いかし  
ら？」

「さあ、きた！」と思いました。た  
だの口述入力のわけがないのです。も  
ちろん、本当にどう続けたら良いか、  
母が分からないはずありません。当  
然ながら、母の中に確かな答えがある  
のです。

その証拠に、私が続きの文章を考え、  
提案すると、すぐに「悪くない。だけ  
ど、違う。理由は～」と、理由もはっ  
きりと、正解を示してきます。



母の穴埋め問題は続きます。

数か月経つうちに、穴がどんどん大きくなります。

「次の段落を、全部、書いてみてちょうだい」

私が、1つの段落をすべて書きます。

母は、そのすべてをなおします。本当に、すべて、です。

私が書いた文字は1文字も残りません。

二度手間です。

つまり、母が一人で書いた方が、はるかにはやく、はるかに楽なのです。

実際、母の体調が良い時ほど、母に時間がある時ほど、私の作業量は増えました。

母は疲れてしまって、私に書かせようとしたわけではありませんでした。

むしろ真逆でした。

書いては母になおされ、また書いては母になおされ、そうしているうちに、「母だったらどう続けるだろうか・・・」、と考えるようになっていきました。

そして、私になおされるポイントも、

だんだん分かってきました。

私の選ぶ単語は、こむずかしいものが多い、ということ。

「同じことを伝えるのだったら、なるべく分かりやすい単語を選びなさい」と、何度も母に注意されました。

私の文章は簡潔すぎる、ということ。

「論文じゃないんだから、もっとふくらませて、もっとたとえを多く使って、豊かに表現しなさい」ともいわれました。

私は、だんだんこの作業が楽しくなってきました。

それは、子ども時代に母と遊んだ、“お話づくり”に、どこか似ていました。

本を読むのをあえて途中で止め、続きを母と二人で予想しました。そして勝手に続きのストーリーを作って、楽しみました。

違うのは、お話づくりの時は、私のアイデアを母が引き出し、形として整えてくれたことでしたが、今回は母のアイデアを私が形にしようとし、母が

それにダメだしをする作業であるという事です。

目的もまったく違う作業でしたが、私は幼い頃の思い出を重ねていました。

そうこうするうちに、たまにですが、私の文章が採用されるようにもなってきました。

見習いの弟子が、師匠にほめられる瞬間です。

少し自信がついたところ、ある時、母が「起・承・転・結」を書いた4つの文章を示してきました。これですべてを書いてみるというのです。

これは散々でした。

ほぼ、原型をとどめないほど、なおされてしまいました。

ショックでした。

さらに口惜しいことに、「私の書いたものの方が良い」と思える箇所は、どこにもありませんでした。

そんなやり取りを、何度も何度も、おこないました。

いつしか、母のアイデアを私がいったん文章におこし、母がなおすという

形が標準になっていました。

母がなおす作業も口述筆記なので、私が手伝います。

もちろん、ほとんどを母がなおしてしまいます。

母が全部書いているも同然です。

しかし、たまに「ここは、このままで良いわ」と、母がぶっきらぼうにいうことがあり、それはささやかな私の“勝利の瞬間”です。

2006年1月発行の216号「多く考える」は、記念すべき母と私の合作といえる号です。最終的に私の文章が、ほんの少しだけですが、採用された号なのです。

そんな作業がその後もずっと続き、ほとんどをなおされてしまった号もあれば、かなり私の文章を採用してもらえた号もありました。

けれども、基本的になおしが入らない号はありませんでした。毎号、なおされています。当然です。

しかし、実は母の名前で発行された最後の号「メンテナンス中」だけは、

母のなおしが入っていません。入院中の母の枕元で原稿を読んだところ、母は笑って、「これでいいわ」とだけ、いました。

それはとてつもなく不吉なことでしたが、その時は気づきませんでした。

書いても書いても、母に打ち消され、なおされ、がっくりきた時には、「いつか一人で全部書いてやる！」と闘志をみなぎらせたものです。

母が突然、亡くなって、一人で「とらいあんぐる」を書くことになった時、私はいつか、抜けるように青い空の日

に、空の上にいる母にむかって、こう叫ぼうと誓いました。

「もう、なおせないでしょう？ もう、私が何を書いたって、自由なんだから。ざまーみろー！！」

でも、私はまだ空にむかって叫ぶことができていません。

そんなことをすれば、涙が止まらなくなるのが分かっているからです。

私の文章をなおす人がもういないというたいへんな悲劇を、受けとめられるようになるには、まだまだ時間がかかりそうです。

(江口 彩子)



## ◆新年度の変更ご希望を受けつけています

新年度がスタートしています。

年度の変わり目には、多くの方が曜日や時間、コースの変更をご希望されました。時間割変更の際には、お時間やコースについて、たびたびご相談のご連絡をさせていただきましたが、ご家族の皆さまのご協力をいただき、とてもスムーズに、新時間割を作成することができました。

いつもご家族の皆さまのご理解とご協力のもとに教室があることを、あらためて実感した期間でした。感謝の気持ちを胸に、また今年度も、スタッフ一同、全力で指導にあたらせていただきます。今年度も、どうかよろしくお願ひいたします。

新時間割は、できる限り、皆さまのご希望にそってお組みいたしました。いざ新生活がスタートしてみると予想とは違っていた、ということもおこるかもしれません。もし、不都合が判明しましたら、レッスン時間の変更についてご相談ください。

レッスン曜日・時間等の変更は、なるべく早く、本部にお電話ください【本部：03-5966-7711（担当・伊藤、矢島）】。4月15日（水）までに、変更希望をおっしゃっていただければ、5月から新しいスケジュールでお受けになることができます。

ただし、年度がわりの変更と同様、曜日や時間帯を変更される場合、原則として担当も変わってしまいますので、その点はどうかご了承ください。

## ◆プリドノフ先生ご夫妻が離日されました

プライベートレッスン、コンサート、オーディション、すべてのスケジュールを終え、客員教授のプリドノフ先生ご夫妻が離日されました。日本の後は、韓国ソウル大学で、マスターコースレッスンをおこなう予定だそうです。

世界中を飛び回るプリドノフ先生ご夫妻が、一音会のためにご尽力くださったことをありがたく思います。レッスンやオーディションを受けた生徒さんは、ぜひ貴重な指導を、今後の勉強に生かしてください。

来年は、5月に来日予定です。ともなう、オーディションも5月におこないます。ここ数年ずっと3月来日でしたので、時期が変わります点について、ご注意ください。

## ◆「第10回ジュニア・コンサート」を開きます

4月28日（火）に「第10回ジュニア・コンサート」を開きます。

「ジュニア・コンサート」は、3月22日におこなわれたオーディションで、難関をくぐりぬけた、7人の生徒さんたちの発表の舞台です。

場所は、西武池袋線「大泉学園」駅前の「ゆめりあホール」です。時間は、開場18：30、開演19：00です。

出演される生徒さんと曲目については、教室内にポスターをはりだして、お知らせします。

チケットは、「ショパンはうす」受付で販売しています。チケット料は、小学生以上が、前売り1000円、当日1500円、未就学のお子さまが、前売り500円、当日800円です。ぜひお得な前売りをご利用ください。

一人でも多くの生徒さんに足をお運びいただけますよう、願っております。

## ◆ピアノ発表会をひらきます

今年の夏の「ピアノ発表会」は、下記の通りです。

7月30日（木）・31日（金）・8月1日（土）・2日（日）  
成増アクトホール （東武東上線「成増」駅より徒歩1分）





今年の「アクトホール」は、一音会にはなじみのホールです。使い慣れた、駅から近い会場です。

大きな舞台に向けて、どの生徒さんにとってもこの3か月が、大きく成長する期間になることを確信しています。どうか、大きく跳んでください。夏の演奏を、楽しみにしています。

「ピアノ発表会」のくわしいご案内は、追ってお配りいたします。ご不明の点は、本部までお気軽にご質問ください【本部：03-5966-7711（担当・谷口）】。

なお、2015年度の年間スケジュール表をお配りしておりますので、その他のイベント日程に関しましては、スケジュール表でご確認ください。

### ◆お月謝の引き落としについて

お月謝は、通常、前月末に引き落としさせていただいていますが、4月27日（月）（5月分）の引き落としまでは、金額調整がどうしても間に合いません。

したがって、例年お願いしておりますように、4月分、5月分のお月謝は、いったん3月までの額で、引き落としさせていただきます。

5月以降、なるべく早く、新年度からのお月謝との過不足分の精算をさせていただきたいと思っております。どうかご了承ください。

### ◆今年もサクラが咲きました

今年も、受験生が、難関音楽大学、音楽高校の受験で、合格を勝ち取られました。スタッフ一同、受験生の皆さんの努力を見守ってきました。皆さんが流した汗と涙は、本当に尊いものだったと思います。

東京学芸大学	（音楽学） 1名
東京音楽大学	（ピアノ専攻） 1名
東京総合芸術高校	（音楽科・作曲専攻） 1名
東京音楽大学附属高校	（ピアノ演奏家コース） 1名
上野学園高等学校	（器楽声楽コース・ピアノ専攻） 1名

無事、進学を果たした皆さんには、この場をかりて、心からお祝いを申し上げます。  
本当におめでとうございます。

一音会では、受験のための準備を、積極的にお手伝いしています。受験のためには、ピアノ以外にも、勉強しなければいけない科目があります。

具体的な志望校についても、相談にのらせていただいています。

音楽方面の進学をお考えの方は、お早目に  
担当スタッフ、もしくは本部まで、ご相談ください【本部：03-5966-7711（担当・谷口）】。



### ◆質問時間が変わります

本部では、生徒さんやご家族の皆さまからのご質問を、メール、もしくは電話でお受けしています。

メールは随時、受け付け、電話は週に1日、夜の時間帯を質問時間帯とさせていただいております。電話での質問時間帯には、レッスンの内容に関するご質問やご相談などにも対応するべく、レッスンを多く受け持つベテランスタッフが待機しております。

昨年度までは、水曜日夜7時半～9時半までを質問時間とさせていただいておりましたが、時間割変更にともない、4月第3週より、月曜日夜7時～9時までとさせていただきます。

もちろん、お急ぎのご相談や事務に関する問い合わせ（イベントや時間割など）は、質問日にかぎらずお気軽にお電話ください（朝9時半～夕方6時半）。

\*\*\*\*\*

スクールの生徒さんのご質問を、以下の2つの方法で受け付けています。

メール：[1000@ichionkai.co.jp](mailto:1000@ichionkai.co.jp)      電話：03-3954-9999

\*お電話での質問時間は、毎週月曜日の午後7時～9時です。ただしレッスンがお休みの日は、質問もお休みとさせていただきます。

\*ご質問は、お一人でも多くの方のご質問にお答えするために、お1人10分を目安とさせていただきます。ご了承ください。